



54 講談社現代新書

現代文の書き方

12の心得



わかりやすく、しかも人をひきつける

印象的な文章は、そうたやすく書けるものではない。

それではいつたい、文章上達のコツは何か。

本書は、ジャーナリストとして著名な著者が、

豊かな経験のなかから、興味深いエピソードや、

名文・名句を引用しつつ、新鮮な感覚で、

現代文の書き方のポイントをつづる。

「習うより慣れよ」の基本的姿勢を保ちつつ、

「3という数字の神秘」

「怒った手紙は一日寝かせろ」など、

現代人の生活の知恵を提供する。

扇谷正造

現代文の書き方

昭和四〇年九月一六日第一刷発行 昭和五一年八月三〇日第二刷発行

著者——扇谷正造

©Shozo Ogiya 1965 Printed in Japan



発行者——野間省一 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―三―三 郵便番号二三 電話東京〇三―九四―二二(大代表) 振替東京八一五三

装幀者——杉浦康平・辻修平

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

●——定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえします(学一)

扇谷正造



の書き方

講談社現代新書

まえがき

新聞記者として、私は、文章はあまりうまい方ではなかった。若いころはまいった。社会部の若い先輩や同僚たちは、気軽にスイ、スイ、スイと記事を書いていく。刷りあがったのを見ると、みんなうまい。私は、しばしば劣等感におそわれた。といって、いつまでも嘆いてばかりもおられない。いろいろ考えた末、私は、いい文章のマネをすることにした。

目標は二人あった。一人は荒垣秀雄氏（前天声人語子）、もう一人は門田勲氏（朝日新聞元大阪編集局長）である。私は、夜勤の晩は古い新聞の綴りこみをとりに出し、二人の先輩の記事をくり返し読んだ。門田さんの文章は、鋭く感覚的で、乾いた空気をカミソリでひき裂くような感じであった。それに対し、荒垣さんの文章は、典雅流麗という趣があった。

そのころ、芥川龍之介氏が、「志賀直哉氏の文章は、紙面に活字が食いこんでいる。これは努力などで出来ることでなくて、生得のものだ」と書いてあるのを見て、また、自分がいやになったりした。ある日、ふと「ジャーナリストの書く文章は、実用文である。何よりも達意簡明であればよい」というのを読み、元気づけられた。（どうやら、それなら、自分にもできそ

うだ……)そして、菊池寛氏の作品をむきほり読んだ。考えてみると、私が作家でなくてジャーナリストを志したのは、しあわせなことだった。

——私事にわたりすぎたが、私が、この本を書く気になったのは、第一に右のような理由による。美人には不美人の気苦労がわからない。文才に恵まれなかった私は、それだけにかえって、この本の書き手としては適任者の一人かも知れない。本書は、いわば、私の「体験的（あるいは告白的）文章論」である。

第二に、この本は、文章論としては、かなり風変りなものだ。何より系統的でない。しかし、学者でない実務家の私は、この本では、「原則はなるべく簡単に」「習うより慣れよ」の方針で貫いた。文例を数多く入れたのはそのためである。いったい文章上達のコツは何か？ けっきょくは、いい文章をたくさん読んで、「感じとる」ことだ、と私は信じている。

それにチョッピリいわせてもらうなら、私は、この本の中で、「曲り角に立つ国字国語問題」ということを、私なりに提示しているつもりです。専門外だが、この問題は書いてるうち、どうも気になって仕方がなかった。

第三に、私は、この本の目安を、中学三年（または高校一年）卒の読み書き能力プラス人生経験七、八年という人たちに置いて書いた。

長谷川伸氏の『シンコ半代記』という自伝的小説に「廊下文字」という言葉がでて来ます。幼少年時代、廊下の拭き掃除をしながら、雑巾で、廊下に字を書いて習ったという話なのですが、かつて、その一節をよんだ時、涙がでてしやうがなかった。

才能にめぐまれながら戦災にあうか、家が貧しいため、義務教育だけで、実社会へ放り出された人たちにとって、この本が、教科書のない人生学校の、せめて副読本ぐらいの役目をはたしてくれたら、私の喜び、これにすぎるものではありません。

最後に、この本ができあがるまで、いろいろ私を励ましてくれた講談社の斎藤宜郎氏および有賀邦子さんの誠実なご協力に感謝いたします。この二人の励ましがなかったら、とうていこの本をまとめることができなかったらうと思います。しるしてお礼を申しておきます。

昭和四十年夏

扇谷正造

目次

まえがき..... 3

1 3という数字の神秘 11

〈1〉 デコちゃんの随筆『黒』

〈2〉 生活の中での3の原則

〈3〉 一つでは物足りない

2 短文の五つの型..... 33

〈1〉 六百字・三分節を計算する

〈2〉 五つの型のそれぞれの文例

- 〈3〉 三分節を他の文にみる

3 パンチの利いた言葉 …………… 77

- 〈1〉 一字のちがいでこう変わる

- 〈2〉 名見出し、台風アウトカーフ

- 〈3〉 家計簿に光る30円

- 〈4〉 言葉の選択三つの条件

4 漢字制限といい換え集 …………… 103

- 〈1〉 『フランス敗れたり』の一節

- 〈2〉 志賀さんと小泉さんの話

- 〈3〉 新しい日本語 いい換え集

5 行と行との間……………129

- 〈1〉 最良の言葉——それは愛
- 〈2〉 人生は一箱のマッチに似ている
- 〈3〉 短い小説のいろいろ

6 手紙の書き方……………169

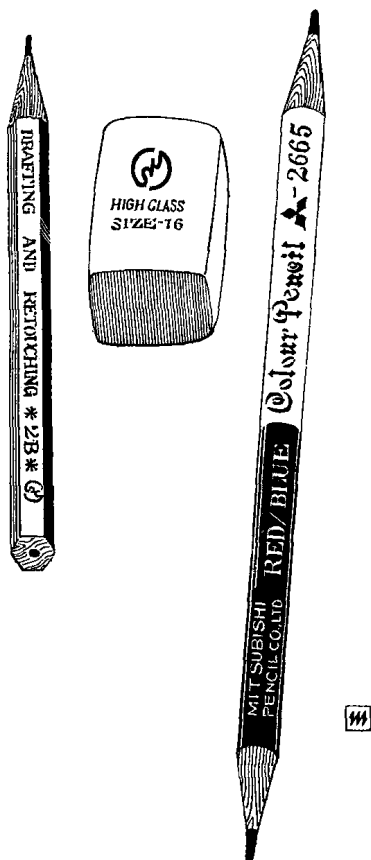
- 〈1〉 短い手紙のいろいろ
- 〈2〉 自分の言葉で書け
- 〈3〉 怒った手紙は一日寝かせろ

7 わかりやすい文章……………207

- 〈1〉 現代文のお手本、新憲法

	8	
	ある提案	243
	要約すると	256
〈2〉	民衆の言葉で書け	
〈3〉	シンダイケンタノム	

1 3 という数字の神秘



〈1〉 デコちゃんの随筆『黒』

高峰秀子さんの『黒』

ここに短い、ひとつの文章があります。映画女優の高峰秀子さんの『黒』というエッセイ（随筆）です。この短文は、昭和三十四年九月八日づけの『朝日新聞』「きのうきょう」欄にのったものです。

どうして、これが問題なのか。まず、本文をお目にかかけましょう。

黒

「お悔みに行くのよ、つらいわ」。そう言ってお隣りの奥さんが坂をおりて行った。その喪服のうしろ姿を見て、「黒っていいな」と思った。喪服の女が美しく見えるのは定評があるけれど、しかし、潤うるんだ心と伏せたまぶたがあつてこそ、はじめて黒の喪服がものを言うので、黒は気

持ちで着る色だと、つくづく思う。

□

白も黒も、のっぴきならない色である。白は気高く潔癖で、黒は内にひかえて沈む色。西洋ではいきな色とされている黒も、日本では政治の黒幕、腹黒いやつ、相撲すもうの黒星、犯人は黒か白かなどと、ろくな形容には使われないし、せんじつめれば抹香まっこう臭く、しょせん黒は凶に通じる色である。

着こなし上手じょうずといわれる人にも、黒はなかなかの難物である。若い人には似合わないし、乱暴に着ればやぼになる。人生の雨風をくぐった年輪を、黒一色で生かすか殺すかは、その人のセンス一つである。つまり、黒は一癖も二癖もある人の着る色と言ってしまえば、黒が似合うというのは、あまり自慢にもならないことかもしれない。いずれにしても、黒を着るのはちょっと「かくご」のいることである。

これに対する正解は、どうなのか。

この本は、ほんらいは受験のための本ではないから、それははぶいてもよいのですが、ついでのこと、三つの問いに対する「研究」と「解答」とを、受験雑誌の解答集から紹介しておきましょう。それによると、こういうことになります。

研究Ⅱ平易だが個性のある文で、ところどころに独特の表現があるから、じっくり取り組んで文意や語義をしっかりと読み取らなくてはならない。(一)は「ものを言う」が「役に立つこと」「力を出すこと」の意であることをつかんで、「黒っていいな」「潤んだ……あってこそ」「気持ちで着る色」などの前後の語句に注意して、適切な表現を考える。(二)は「人生の雨風をくぐった年輪」「その人のセンス」「一癖も二癖もある人」に注目して導く。「一癖」は特殊な性格や才能などのこと。(三)は「黒はなかなかの難物」で「一癖も二癖もある人」の着る色だから、十分にこれを着こなすに足るだけの身構えが必要であることを意味する「かくこ」であるとかめよう。(一)(二)(三)ともに、簡にして要を得た表現はなかなかむずかしい。問題文を十分に消化したうえで一語一語に注意して記述することが大切である。